



魔王のいけい、世界に
勇者は必要ない
そう
2

Mugen no Tsubasa

[著] 夢幻の翼

[絵] Csyday

登場人物紹介

CHARACTERS

ヒューマ

元勇者パーティーの斥候で、
弓と短剣を使いこなす。
口下手だが責任感の強い青年。

アルファート (アルフ)

本作の主人公。魔王を倒した元勇者で、
剣技、魔法ともに他を圧倒する実力を持つ。
破天荒に見えて、超お人好し。

セイレン

精霊樹を守護する精霊鳥の一柱。
あらゆる知識に精通し、
見かけによらず頼りになる。

コネン

謎多き冒険者。
飄々としていて、
人の懐に入るのが上手い。

ガーネット

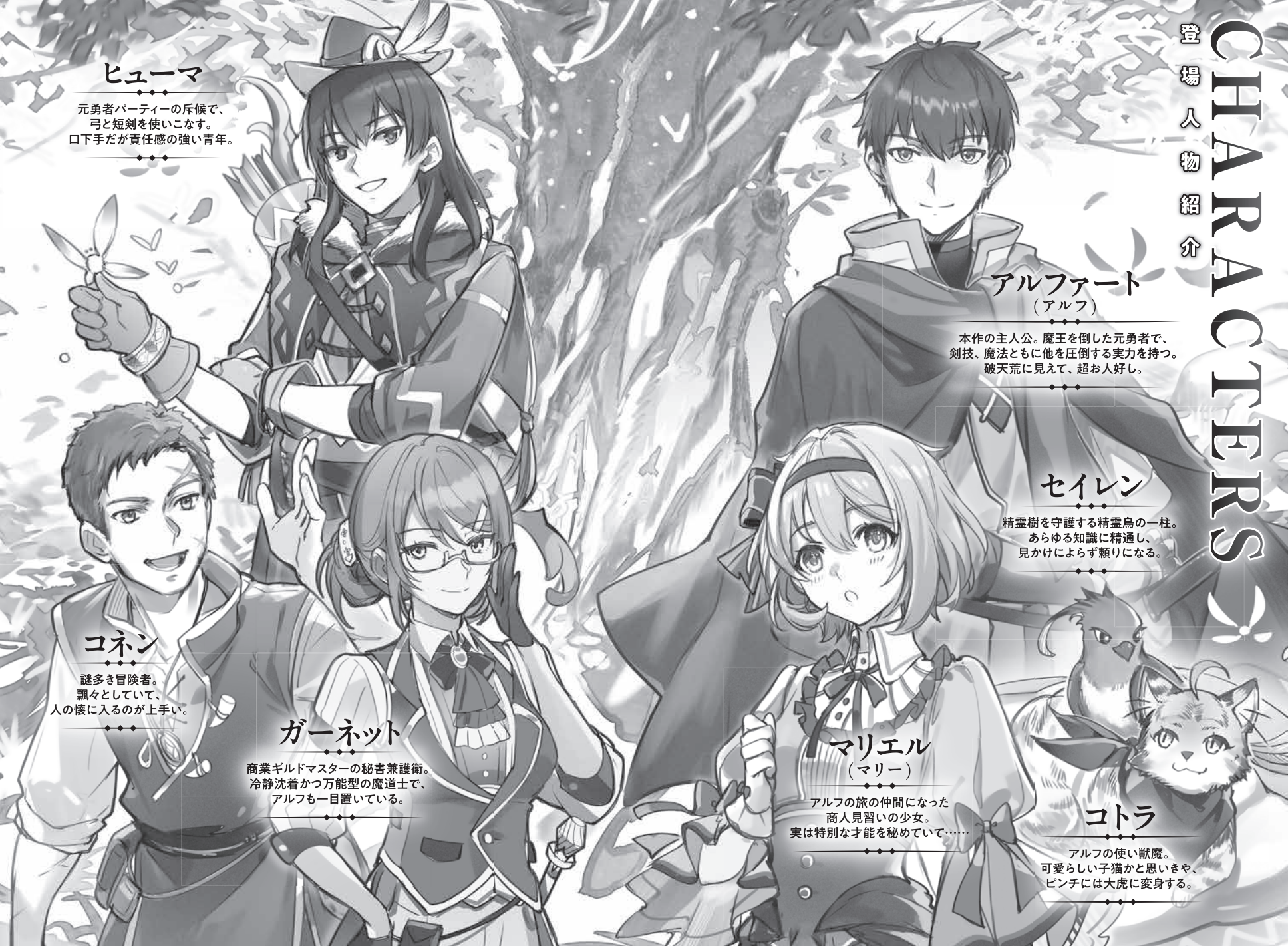
商業ギルドマスターの秘書兼護衛。
冷静沈着かつ万能型の魔道士で、
アルフも一目置いている。

マリエル (マリー)

アルフの旅の仲間になった
商人見習いの少女。
実は特別な才能を秘めていて……

コトラ

アルフの使い獣魔。
可愛い子猫かと思いきや、
ピンチには大虎に変身する。



その日、俺——アルフとマリーは、リリエルの見送りを受けた後、大森林の遺跡いせき近くにあるダクトの町へ向かう準備をするために冒険者ギルドを訪れていた。

「——ああ、アルフさん。よかった、やっぱりまだ出発されていなかったのですね」

ギルドに入ると、受付の女性が俺の姿を見つけ、ホッとした表情で呼びかけてくる。何か急ぎの伝言でもあったのだろうか。

「昨日は急に馬車への乗車をキャンセルしてすまなかったな」

彼女の話も気になるが、まずは昨日の直前キャンセルについて謝罪の言葉を伝えた。

「いえ、当日のキャンセルは前金の没収だけで、他のペナルティーは規定にありませんのでお気になさらずに。ですが、一応理由を伺ってもよろしいですか？」

俺の隣にマリーがいるので大方の理由は推測出来ているだろうが、確認のためにそう問いかけてくる。

「彼女の所有する馬車が使えるようになったから、遺跡へはその馬車で向かおうと思ってな。だから乗合馬車を断ることにした」

マリーとの経緯は個人的なことだったので、詳細なことまで説明する義務がないと考えた俺はそう言って話を切った。

「分かりました。代替の移動手段が確保出来たので不要になったと報告しておきますね。ああ、そうだ——」

彼女はキャンセルした件についてそれ以上のことは言わずに、俺に声をかけた理由を話し出す。

「実は、先ほどギルドマスターが戻られまして、アルフさんが盗賊たちを捕らえた件の報奨金額が決まったそうなのです」

言われてみれば、捕まえた盗賊——『闇夜の宴』のメンバーには、懸賞金が懸けられていると言っていたような気がする。すっかり忘れていたが……。

「それで、今からギルドマスターと面会して頂けませんか？」

「ギルドマスターと？ 今からか？」

正直言って面会は面倒だったが、懸賞金をもらえるとなれば断る理由もない。それに、あの古の魔道具を持っていた『闇夜の宴』の男から聞き出した情報が欲しかった俺は、彼女の話を頷いた。「では、応接室へお願いします。お連れの方はどうされますか？」

マリーは事件に巻き込まれただけが、巷を騒がせている盗賊団の動向は聞いておいて損はないだろう。マリーも同席することを伝える。

受付嬢はそれを了承すると、俺たちを部屋に案内し、ギルドマスターを呼びに向かったのだった。

「——お待たせしました。ギルドマスターが来られました」

応接室のソファで待つこと五分。ノックの音がして先ほどの受付嬢の声が部屋の前方から聞こえたかと思うと、リッツが部屋に現れた。そのまま目の前に座ると話し始める。その顔を見るに機嫌はいいようだ。

「アルフ君、先日は手柄だったね。あれだけの人数を全て不殺で捕らえているとは思ってなかったよ。特にあの大男は『闇夜の宴』盗賊団では幹部とされる一人だったので、有益な情報を確保出来そうなのは非常に好ましい状況だ。口を割らせるのは苦労しているがな」

リッツは口元を緩めながらそう話すと、自らの前に置かれた香茶——香り高いことからそう呼ばれている——に手を伸ばす。

「そういえば、アルフ君は以前エンダーラにいたと言っていたね。今回の盗賊との一件も冒険者ギルドの依頼を遂行している途中にあったことだと聞いている。その辺りのことも是非とも君の口から聞いてみたいと思うのだが、話してくれるかね？」

正直、俺は面倒だなと思いつつも、何から話そうかと頭の中で過去の出来事を整理する。

俺はマリーの護衛依頼を受ける前は、国から勅命を受けた勇者だった。世の中を恐怖のどん底に陥れる魔王を倒すべく各国が派遣した仲間たちと共に、その使命を果たしたのだ。だが、権力欲の強い国王の一言により、少額の報酬のみ手渡され武器を奪われ、勇者を解雇された。俺はその

態度に落胆し、国を出ることを決意。その際にせめてもの報復として国王の髪と髭を永久脱毛してやった。プライドの高い国王のことだ、今頃はどなり散らしながらも表には顔を出せないでいることだろう。

「ふふっ」

不意につるつる頭の国王の姿が頭に浮かび、思わず笑いが込み上げてきた。その様子にリッツは不思議そうな表情で「どうした？」と問いかけてくる。

「いや、何でもなし。少し昔のことを思い出しただけだ」

今回の話でマリリーの護衛依頼を受ける以前のことを話す必要はないだろう。俺はマリリーとの出会い以降のことを思い起こしながら話す。

「今回の件は、エンダーラ王国キロトンの町で彼女——マリリーから引き受けた護衛依頼中に発生したことだ」

マリリーとは、俺が王国から出ようと旅する途中で立ち寄ったキロトンで出会った。

彼女は若くして両親を亡くし、唯一の肉親である叔母リリエルを頼って、今俺たちがいるマイルーンに向かおうとしていた。俺はその護衛を引き受けることにし、行商人だった父の遺した馬車の積み荷を売りながら旅する彼女と共に、いろいろな土地を巡っていった。

「彼女の目的地がマイルーン的首都だったからな、ポンドール国を通過してマイルーンとの国境砦に行き、そこから首都へ向かったんだが……その途中にあった旅人向けの宿泊施設で問題が起

こった」

俺は、自らのミスでマリリーが攫われたことを思い出して苦い顔をするが、話さないわけにもいかずそのまま話を続けた。

「その宿泊施設はギルドの管理下にあつたはずだが、奴ら——『闇夜の宴』の手に落ちていて、旅人を獲物としていたようだ」

「そのことは、報告を受けている」

「俺も迂闊だったが、ギルドの関係者だと油断した俺の隙について、彼女を誘拐されちゃった。気がついてすぐに救出へ向かったところ、そこが『闇夜の宴』のアジトのひとつだったってわけだ。

その後は奴らと一悶着を起こして全員捕らえたのさ。ただ、あの水龍を発生させた古の魔道具は脅威だった。あれを使いこなす者が現れたら、並大抵の実力では太刀打ち出来ない。絶対に出所を掴む必要があると思うぞ」

「ああ、それは我々も承知している。全力で対処するつもりだ」

「そうしてもらえると助かる。しかし、俺が聞きかかったのは正にその部分なんだが、詳細はこれからのようだな」

「ああ。いくつかの情報は聞き出すことが出来た。ただ、古の魔道具に関しては何が堅いのか本当に知らないのか分からないが、情報が掴めないな。だが、盗賊団を捕らえた君には、分かっている限りのことだけでも知る権利があるだろう。裏付けが済んでいないもので申し訳ないが、現時点の

情報を話そうと思う。ところで、この話は隣にいる彼女にも聞かせて問題ないかね？」

「ああ。彼女も当事者の一人だし、しばらくの間は俺と行動を共にするつもりだから、何かあった時のために情報を共有しておいて問題はないと思ってる」

「そうか。そう考えているなら問題はないだろう。だが、念を押しておくが、この情報はまだ裏付けが取れていないものだ。全てを鵜呑みにするのは危険だと理解しておいてくれたまえ」

リッツの言葉に俺が頷くと、彼は順番に話してくれた。

「今回、君が捕まえた『闇夜の宴』盗賊団の幹部とされる男を尋問したところ、奴がこの辺りの元締めであることが判明した。奴の証言では、現存する盗賊団は各国に散らばっており、それぞれに幹部が存在し、まとめ役として幅を利かせているようだ」

「それで、奴らの本拠地は聞き出せたのか？」

「それを喋れば用済みだと殺されると思っただけか、一切その手の質問には応じるつもりがないよ
うだ」

「そうか。やはり詳しいことはこれからのようだな。いずれにしても、俺個人がやれることなどほとんどないからな。奴らのことはギルドに任せるよ」

俺の言葉に頷いたリッツは、職員に持つてこさせた報奨金の入った袋を机に置いて、説明し始める。

「何か情報が掴めたらギルド経由で分かるようにしておく。そして、これが今回の懸賞金だ。頭を

痛めていた盗賊団の幹部を生きたまま捕らえたことと、ギルドの管理している宿泊施設を奴らから取り戻してくれたことに対する報酬だ」

俺の前に置かれた袋は外からは金額が分からないが、少なくとも王城でもらった金額の数倍以上はありそうだった。

「まあ、不殺が出来たのは偶然だったが、情報が得られたのはよかつたと思う。また同じような場面にいくわしたら、出来る限りギルドに協力するさ」

報酬が予想以上に多かつたので、俺の頭の中では『盗賊は殺さずに突き出せば金になる』の方式が完全に出来上がった。

「——この後はどうするんだ？ キャンセルしたとは聞いたが、もともと馬車の予約をしていたんだらう？」

「ああ。大森林の遺跡に行ってみようかと思ってるよ」

盗賊団を倒した後、俺はマリーを叔母リリエルの元に送り届けた。そのまま、かねてから行きたいと思っていた大森林の遺跡に向かおうとしたのだが……追いかけてきたマリーに呼び止められた。マリーは行商人になりたいという夢のため、俺との旅を続けたいと申し出てきたのだ。

俺はそれを受け入れ、共に遺跡に向かうことにしたというわけだった。

「大森林の遺跡だ？ まあ、Bランクの君なら問題なく入れるとは思いますが、隣にいるお嬢さんが一緒に行ける場所ではないぞ。それとも、彼女は実は相当な実力者だったりするのかわ？」

「それはありません。私は普通の商人ですの」

リッツの問いに、マリーは控えめだが、はつきりとした声で返事する。以前は引つ込み思案で、質問にもなかなか答えられなかったはずだが、成長したものだと言は感心する。

「大森林の遺跡へ向かうならば——ダクトの町経由だな」

報酬の件が終わったタイミングで、突然リッツがそう話し始めた。

「まあ、そうなるな」

「ならば、ついでに依頼をひとつ受けていかないか？」

依頼？ ギルマスが直接依頼するものだと、難易度が高いか守秘義務があるのだが、果たして……。

「どんな依頼だ？」

多額の報酬を得たばかりの俺は、彼の話し方に嫌な予感を感じた。だが、内容も聞かずに断るのは不義理だと思い、依頼内容を確認することにした。

「おい、アールド商会の護衛依頼の書類を持ってきてくれないか？」

リッツは傍に控えていた女性にそう告げると、俺に向かつて簡易的に説明をする。

「詳細は依頼書を持ってくるが、これからこの町の大手商会の会頭がダクトに向かう予定がある。もちろん大手の商会だから専属の護衛はいるのだが、Cランクのパーティーなのだ。普段ならそれでも問題ないが、最近はその盗賊の目撃情報もあるくらいだから、Bランクの君が同行する

なら安心出来ると思ってな」

「その商会馬車に、こちらの馬車で随行するということか？」

「ああ、そうなるな。護衛料は……」

彼は持つてきてもらった書類を確認してからその報酬額を言おうとするが、俺はそれを聞く前に断りの返事を告げた。

「すまないが、断らせてもらうよ。急ぐ旅でもないし、マリーにも気を使わせることになる。金銭面もそれほど切迫しているわけではないからな」

「そうか。いや、無理を言っすまなかつた。相手が少々大手の商会なので、ギルドとしてもBランクの護衛を紹介出来ればと考えただけだ。気にしないでくれたまえ」

「分かった。ではこれで失礼するよ」

俺はそう言っ立ち上がると彼に礼を伝え、マリーと共に応接室を後にしたのだった。

「——大森林の遺跡に関する情報はあるか？」

応接室からホールに戻った俺たちは、目的地である遺跡の情報を確認するために、受付嬢に話しかける。

「遺跡の情報に关しましては、ダクトのギルドで確認された方がより正確な情報が手に入りますのでそちらを推奨しますが、概要でよろしければこちらをご覧になってください」

受付嬢はそう言って一枚の紙を渡してくれた。

その紙には遺跡の場所と、浅層階せんそうかいについての簡易な情報が記載されていたが、最後には『詳細はダクト冒険者ギルドにて有料販売しております』と書き添えられていた。

「なるほど。要は現地で最新情報を買えというわけだな」

俺はその内容に納得すると、受付嬢に礼を言ってから冒険者ギルドを出ることにした。

「冒険者ギルドで得られる情報はこれくらいだろうから、次は商業ギルドにも顔を出しておくでしょう。マリーもこれから自分の名前を背負って商売をするつもりなら、名義を亡くなったお父さんから自分に登録変更しなければならぬだろ。今回がいい機会だと思いがどうだ？」

「え？ いいのですか？」

俺の提案にマリーが驚いた表情で問い返してくる。

「確かに、俺の旅に同行しながら商人の勉強を、とは言ったが、機会があれば実際に商売してみても経験を積むことは大切だ。そうでなければ商人としての成長は望めないだろう。それに、マリー自身が商人の資格を有していれば、町への出入りや滞在にも理由が出来る。面倒なトラブルを避けられるかもしれない」

これまでマリーは、亡くなった父親の積み荷を売ることと路銀を稼いでいた。しかし、マリー自身が商人の資格を持っているわけではなく、あくまで父親の代行のような立場だった。

正式な資格がないと商売出来ないというわけではないが、名義変更しておけば、信頼度が増すは

ずだ。

「ありがとうございます」

マリーは俺の顔を見てそう言うと、嬉しそうに笑ってくれた。



——リンリン。

冒険者ギルドを出て、向こう正面しょうめんにある商業ギルドのドアを開けると鈴の音が鳴り、冒険者ギルドと同じく、すぐに用件伺いの女性職員が歩み寄ってくる。

「本日のご用件を伺ってもよろしいでしょうか？」

「彼女の商人登録をしたいのだが」

「新規でしょうか？」

「彼女の父が登録をしていたが、先日亡くなったため彼女がそれを引き継ぎたいと言っている。だが、どうすればいいか分からなくてな」

「ああ、登録の継承けいしょうですね。では、お父様が持っていた商業証明書の提示をお願いします」

女性職員はテキパキと受け答えしてくれる。手順についても分かりやすい説明があつて、マリーは滞りなく手続きを終えた。マニュアル通りなのだろうが、効率的かつ丁寧で、とてもいい対応だ。

「はい。これで手続きは完了となります。こちらがあなたの商業証明書になります」

「ありがとうございます！」

女性職員が更新された証明書を嬉しそうな表情のマリーに手渡す。

「これからどちらへ？」

世間話に近いだろう質問に、マリーがすぐに答える。

「ダクトの町に。大森林の遺跡にも興味がありますので、しばらくは留まることになるかもしれませんが」

「――君たちはダクトに向かうのか？」

マリーの声に突然、男性の声が重なった。

「キースギルドマスター」

女性職員が声の主を見てそう叫ぶ。いきなり話に入ってきた上司にびつくりしたようだ。

「一応、その予定ですが、何かあるのでしょうか？」

マリーがキースと呼ばれた男性にそう問いかけると、彼は頷いてから話を続けた。

「実は、これから私も公務でダクトに向かわなければならぬのだが、準備していた馬車が破損してしまつてね。修理しては到底間に合わないから、ダクトに向かう馬車があれば便乗させてもらおうと考えていたところだったのだよ」

「それならば、冒険者ギルドに頼めば馬車くらい貸してくれると思うが……」

キースの言葉に俺が疑問を投げかけると、彼は露骨に嫌そうな表情を浮かべて説明してくれた。

「まあ、町によるかもしれないが、私と冒険者ギルドマスターのリッツは同期のライバルだね。お互いに借りを作るのを非常に嫌うのだよ。おーい、ガーネット君。アレを頼むよ」

キースはリッツとの関係について話すと、別の職員を呼んだ。

「はいはい。こちらですね。交渉はご自分で出来ますか？」

ガーネットと呼ばれたのは三十路ほどに見える女性で、青みのある長い髪を綺麗に結い上げた、落ち着いた雰囲気印象的な人だった。他の受付嬢が着ているのとは色違いの制服を身に着けている。

「ああ、ありがとう」

ガーネットから書類を受け取ったキースは、俺とマリーを見ると迷いなくマリーに書類を手渡し、説明し始める。

「君が馬車の所有者で合っているな？」

「は、はい」

いきなりそう聞かれたマリーは反射的にそう答える。

「横の彼は？」

「ア、アルフさんは……。えっと」

マリーとは外部に俺との関係をどう説明するか話し合っていなかったので、彼女は言い淀んでし

まう。

「保護者兼護衛だ」

マリーが俺の顔を見たので代わりにキースにそう答えると、彼は頷いてから俺に向き直る。

「商人である彼女が主人で君はその護衛だと思っていたが、保護者の役割も担っているならば話は別だ。アルフ君だったかな？ 彼女と直接交渉してもいいが、こちらも急いでいるのな。この内容で依頼を引き受けてはくれないか？」

キースはマリーに渡した紙を俺にも見せるように伝えて、俺の返事を待った。

「ちよつと見せてくれ」

俺はマリーから依頼書を受け取り、その内容を確認して驚く。

「本当にこんな条件でいいのか？」

そこに書かれていたのは普通ではありえない好条件で、逆を言えば商業ギルドマスターの権限をフルに発揮したような内容だった。

「どうかね？ そちらに不利な条件ではないと思うが」

確かに内容だけ見れば俺たちに不利益となる条件はなく、逆にメリットばかり。相手がギルドマスターでなければ、まず詐欺を疑うレベルとも言えた。

それに、商業ギルドマスターに顔売れたら、マリーの今後にとってもいいのではないだろうか。

「マリー、この依頼を引き受けてもいいか？」

俺が決める旅とはいえ、使うのはマリーの所有する馬車である。全てを俺の勝手にするつもりはないので、当然マリーにも意見を求めることにしたのだ。

「私は構いませんが、本当に可能なのでしょうか？」

「向こうが出来るかと判断しての依頼だからな。何かあれば補償もするとあるし、相手は王都商業ギルドのトップだ。下手な嘘はつかないだろう」

俺はマリーとそう話し合った後で彼に告げた。

「依頼を引き受けることにするが、本当に大丈夫なんだろうな？」

「もちろんだ。御者もこちらで用意するので、準備が出来るまで一時間ほど待ってくれ」

大げさに喜ぶギルドマスターにため息をついてから、俺はマリーと共にギルドに併設されている食堂で飲み物を注文して、彼らの準備が整うのを待ったのだ。

2

「——待たせたな」

ちよつと一時間ほど経過した頃、キースはガーネットと二人で現れた。

「乗るのは二人だけか？」

「君たちの馬車を見せてもらったが、荷物を片付けても二人が限界だろう？　こちらも頼んだ手前、無茶な要求はしないつもりだよ」

キースはそう言う。「さあ、出発しようか」と続けて、ギルド傍の施設に停めてあるマリーの馬車へと歩き出した。

「わたくしが御者を務めますのでどうぞ後ろにお乗りください。なお、馬と馬車に強化魔法を使つて通常よりも速く走りますので、馬車の揺れに弱い方はご自分にも強化魔法を施された方がいいでしょう」

馬車の傍まで来るとガーネットが突然そう言つて、おもむろに馬車全体に強化魔法をかけていく。

「これほどの範囲の強化魔法を展開出来るとは。彼女、かなりの手練れだな」

俺はガーネットの魔法に感心しながら、キースにそう感想を話した。

「あ、わたくしのことはガーネットとお呼びくださつて結構ですよ。ええと、そちらの女性はマリー様といいましたね？　あなたはわたくしの横にお乗りください。わたくしの強化魔法の範囲内ならば負荷は軽減されますので」

ガーネットの言葉に首を傾げたマリー。しかし、そう言われて断るのも変だと、留守番をしていた猫の姿の俺の使い獣魔、コトラを抱いたまま、御者の補助席へと腰を下ろした。

「荷物に壊れやすいものは？」

キースがそう聞いてくるが、もともと破損リスクの高い品物は俺の収納魔法に入れていたので

「大丈夫だ」と答えて、大きめの荷物に身体を預けた。

「移動時はかなり揺れますのでご注意ください。また、獣などの障害が現れた場合は、停止して排除にあたる場合がありますのでご了承ください」

「ちよつと待て、獣の対応は君がするのかわ？」

ガーネットの言葉に驚いた俺は、思わずそう問い返す。

「当然です。それが御者護衛の役目ですよ。ああ、あまりにも排除対象が多い場合はアルフ様にもご助力頂くことになるかもしれませんので、その場合はよろしくお願ひしますね」

それが普通のことのように話すガーネット。俺が思わずキースを見ると、彼は黙って頷いているだけだった。

「本気かよ」

俺がそう呟いた時、ガーネットの声が響いた。

「では、出発いたします」

いきなり猛スピードで走ると思いきや、予想に反して馬車はゆっくりと進み出す。

「街中はゆっくりと進みますが、街道に出たらスピードを上げますので、振動で舌を嘔まないように気をつけてください」

ガーネットの不穏なセリフの通り、ダクト方面の門を抜けた馬車はいきなり急加速し始める。

——ゴゴゴゴゴゴゴ。

「は、は、速い!？」

普通の馬車が進む速度の二倍は速く感じられるスピードだ。整備されているとはいえ、舗装されているわけではない道を高速移動すれば、当然馬車の揺れは数倍となる。

「きゃああああ!？」

加速してすぐに御者台からマリーの悲鳴が聞こえ、続いて「大丈夫ですよ」と冷静なガーネットの声が聞こえてくる。

「お、おい。いくらなんでも飛ばしすぎなんじゃないか?」

俺は目の前で涼しい顔をしているキースにそう叫ぶ。

「はっはっは。まだまだ、このくらいなら問題ないぞ。彼女が本気を出したらこんなもんじゃ済まないからな」

とてもではないが、歩きの護衛が同行しては出せないスピードに驚きながら、俺は依頼を受けたことを既に後悔し始めていたのだった。



「——ふう。予想以上に凄まじいスピードだったな」

王都を出発して数時間でもう予定の半分の場所まで辿り着いた俺たちは、休憩スポットで茶を飲

みながら身体を休ませていた。

「強化魔法をこんな使い方する人は初めて見たぞ。今までよく馬車が壊れなかったな」

いや、待てよ。そういえば『ギルドの専用馬車が壊れたから同行させて欲しい』と言っていたな。これが原因じゃないのか?

俺自身も身体強化魔法は使うので、この類の魔法に理解はあるつもりだったが、馬を含めた馬車自体に魔法をかける者には初めて会った。しかし、いくら馬車自体に強化魔法をかけても、劣化する速度が速いなら、運用を考えた方がいいと思う。

「この走法を編み出したのは他でもない彼女、ガーネット君なのだよ。私が仕事の都合でどうしても間に合わないと言ったら、彼女は淡々と準備をすっ飛ばしていつてくれたのさ。まあ、その時は自身に強化魔法をかけるなんて知らなかったから、目的地に着いた時には振動で足腰が立たなくなっちゃった。で、結局は治療に時間をとられて遅刻をってしまったがな。まあ、いい経験だったよ。はっはっは」

それは笑うポイントなのかと思ったが、本人が楽しそうだったのであえてツッコミは入れずに黙っておいた。

「では、そろそろ出発しましょうか」

三十分ほど休憩した頃に、ガーネットが御者台上がり俺たちにそう告げる。

「やれやれ、もう出発か。ガーネット君はせっかちだな。だがこのペースならば、もう二時間ほど

で經由する村に辿り着けるだろうから、村でゆっくりした方が正解かもしれない」

キースが彼女の言葉に反応してそう答えると、俺たちもゆっくりと馬車へ乗り込んだのだった。

「——キース様。前方に怪しい反応が」

休憩スポットを出発して三十分もしないうちに、ガーネットが馬車の走行速度を極端に緩めてキースにそう報告をする。

「前方……？」

俺はガーネットの言葉に探索魔法を前方に展開して様子を探ってみる。すると、確かに不自然な魔力の塊の存在を感じた。

「先を行く馬車が何者かに襲われているようだね。助けた方がいいのか？」

基本的に馬車の運行には専属の護衛がついていることが多く、何かトラブルがあった時はその護衛が対応するのが自然だ。ましてや、まだ探索魔法で気がついただけで実際に現場を目視したわけではない上に、助けを乞われたわけでもない。仮にその馬車が被害に遭って全滅したとしても、こちらには何の責任もないことは明白であった。

「こちらとは無関係ですが、このまま進めば現場に遭遇することは避けては通れないでしょうね」
馬車を完全には停めず、ゆっくりと進ませながら、ガーネットはキースの指示を待つことを選んだ。

「このタイミングでダクトに向かう予定があると報告していた奴はいたか？」

「わたくしの担当ではありませんが、アールド商会の馬車が近々ダクトへ向かう予定があったはずですよ」

「ああ、奴の馬車か。あまり気は進まないが、一応、商業ギルドと昔から取引がある商会だからな。仕方ない、対応してやってくれ」

「分かりました。では、このまま現場まで進みますね」

キースの言葉にガーネットが頷き、馬車はまた加速し始める。

「あまり気のりがしないようだな」

キースの態度に俺は少し興味を持って、そう尋ねてみる。

「彼の商会はなかなか大きくてね、取り扱う商品が多くてギルドとしては重宝してはいるのだが、二代目のアールドという男は目に余る行為もちらほらと報告されているのだよ。たとえば、ウチの受付嬢に手を出そうとしたり、業績の伸びてきた商会の主力を引き抜いたりね」

「……引き抜きねえ」

「先代が残した莫大な資金を有しているからな。気に入った人材は金にものを言わせて引き抜くのだよ。まあ、引き抜いたら終わりってわけじゃなくて、高給のままちゃんと面倒をみていることだけは評価するが……。そうでなければ既にギルドとして厳しい対処をしているさ。まあ、私個人としてはあまり好きではない人物だ」

俺に事情を話しながら、キースは露骨に嫌な表情を見せる。

「馬車が見えてきました！ どうやら相手は猿の魔物——キラージェイブの群れようです！」

ものの数分ほどで襲撃現場を目視出来る距離まで詰めた俺たち。ガーネットの言葉を聞いて、先の行動指針を決める。

「あまり近づくとこちらの馬車にも被害が飛び火するかもしれないから、俺だけ加勢するってことでいいか？」

俺の提案に、キースが驚いた様子で問い返してくる。

「いいの？ 君には全く関係のない商人の馬車だが？」

「どうせ排除しなければ先に進めないからな。こっちの護衛はガーネットさんだけになるが大丈夫か？」

俺が彼女を見ると、ガーネットは問題ないとばかりに頷いて肯定する。

「ならば、すまないが頼む。ああ、助けた後の報酬は、俺がしっかりと取り立ててやるから心配するな」

キースはそう言って俺を現場に送り出してくれた。

「そっちに行ったぞ！ 絶対に馬車には近づけるな！」

「くそっ！ 数が多すぎる！ なんでこんな所にこれだけのキラージェイブが出てくるんだ!？」

馬車から飛び降りた俺が襲撃されている馬車に向かって走り出すと、護衛たちの怒号が聞こえてくる。

「おい、お前たち！ さっさと猿どもを片付けんか！ 早くしないと報酬を減らすぞ！」

さらに近づくと、馬車の窓から顔を出して、護衛に対して怒鳴り散らすハゲ頭が見えた。

「石礮弾」

ギギイ！ キー！

俺の放った魔法が一匹のキラージェイブに刺さり、悲鳴を上げてドサリと倒れる。

「状況は!？」

いきなり飛び込んできた俺に護衛たちは一瞬驚きはしたが、キラージェイブを仕留めたことで援軍と判断したようで、すぐに敵へと意識を集中してくれた。

「分かっているのはキラージェイブがあと五匹！ ただ、姿は見せないがそれを指揮しているビッグエイブがいるようだ。あなたは魔道士か？ そうならば遠巻きにしているキラージェイブを牽制けんせいしてくれたら助かる！」

声をかけたのがどうやらリーダーだったようで、すぐに欲しい情報が聞けたのはラッキーだった。「ビッグエイブか、あなたは奴に勝てるのか？」

俺は指示通りに魔法を放ち、こちらを遠巻きにしているキラージェイブを牽制しながらリーダーの男に問いかける。

「正直、一人では無理だ！ メンバー全員でかかって勝てるかどうかとあったところだろう。何か策でもあるのか？」

「いや、策は特にないが、あんたらで無理なら俺が倒してしまってもいいか？」

「本気で言っているのか!? ビッグエイブだぞ！」

「まあ、任せておけ。キラージェイブも二匹ばかり減らしておいてやるから後はよろしくな」

俺はそう叫ぶと地面に手を置いてから魔法を唱える。

「岩針弾」

ギギッ。

ギヤッ。

キラージェイブが木から地面に降りた瞬間に、死角となる地面から鋭く尖った岩が飛び出し、キラージェイブを串刺しにする。奴らは何が起きたか理解する間もなくその命を終えた。

「すげえ」

護衛のリーダーは驚きながらそう呟くが、すぐに気を取り直すようにして仲間に向かって叫ぶ。

「その男は助人大！ ビッグエイブを仕留めにいったからそっちは任せて、残りのキラージェイブに集中するんだ！」

俺はその言葉を聞いてから探索魔法を使い、より強そうな気配の元へと向かう。

ギギギギイー。

木々の間から叫び声が聞こえたかと思うと、引っこ抜いたであろう太い木がこちらに向かって飛んでくるのが見える。

「たいした歓迎ぶりだが、力まかせの攻撃じゃ俺には届かないぞ」

俺がそう口にしなからその攻撃を躲したところで、ビッグエイブが木々の中から姿を現した。

手下のキラージェイブを殺られた怒りからか酷く興奮しており、こちらに対して強い殺意を持って向かってくる。

「森の中では木が邪魔で魔法は使いにくいかもしれないな。仕方ない、久しぶりに剣で相手をしてやろう」

俺は人の目がないことを確認して、収納魔法から一振りの長剣を取り出し、右手に持ち攻撃に備える。

「さあ、どこからでもかかってきな！」

ビッグエイブは木の枝を渡りながら、その巨体に似合わないスピードで俺の周りを一定の距離を保ちながら移動し続ける。

「素早い動きで獲物を翻弄して死角から襲うつもりなんだろうが、全くの無駄だぜ」

俺は目を閉じてビッグエイブの気配を辿りながら、飛び込んでくるのを待った。

ギッ！

やはり獣の習性か、ビッグエイブは襲うタイミングで小さく叫び声を上げてしまう。集中するま



でもなかったな。

「ここだ」

俺は飛び込んできたビッグエイプの爪をスツと躲すと、長剣を奴の額へと突き立てた。

ギギギギ！

次の瞬間には、止まりきれなかったビッグエイプの額に深々と長剣が刺さり、後頭部まで突き抜けていた。

「凶暴化していなければこんなものか。やはり魔王がいなくなったことで凶暴化する獣も少なくなつて、比較的安全に討伐出来るようになったようだな」

俺は深々と刺さった長剣を引き抜いて、血を布で拭^{ぬぐ}うと異空間収納魔法の中へと仕舞い込む。

ちなみに、異空間収納魔法というのは俺にしか使えない特別な魔法で、物を劣化させず無^む尽^{じん}蔵^{ざう}に保管することが出来る。ただ、人に知られると面倒なことになるので、普段何かを取り出す時は、魔法靴から出しているように見せかけていた。

それから意識を護衛たちの場所へ向けると、まだ戦闘は続いているみたいだった。

「右へ行ったぞ！ しっかり足止めをしてからトドメを刺すんだ！」

どうやら三匹のうち二匹は仕留めたらしい。最後の一匹をメンバーで囲んで、トドメを刺すタイミングをはかっていた。

ギギー。

キラージェイブは仲間が全て殺られたのを理解したようだ。逃げの一手で囲みから脱出しようと、一番弱そうな者を飛び越そうと高く飛んだ。

「うわっ！」

高い跳躍に護衛の一人が思わず声を上げて転び、その隙にキラージェイブが囲みから脱出して真っ直ぐに森へと走り出す。その直線上にはガーネットたちの馬車があった。

「あぶない！ 逃げるんだ!!」

護衛たちが声を揃えて叫ぶが、ガーネットは全く怯む様子がない。魔法を唱え、目の前へと打ち出した。

「氷の矢」

ギユワ!?

ガーネットの目の前に氷の矢が複数出現し、飛び込んできたキラージェイブの厚い胸板へ深く突き刺さる。そのままその身体は大きく後ろに倒れたのであった。

「少々やりすぎましたか」

身体に複数の穴を空けて絶命したキラージェイブを見て、ガーネットはそう呟いたのであった。

「凄いな。魔法の威力もだが、キラージェイブが飛びかかってくる緊張感の中で、冷静に素早く魔法を発動させる胆力も持っているようだ。どうして商業ギルドの受付嬢兼護衛なんかやっているんだ？」

「だ？」

馬車に戻ってきた俺は、倒れているキラージェイブの死体を見ながら、ガーネットにそう問いかけた。ただ、その直後に最後のキラージェイブを討伐した護衛のリーダーの声が響いてきたので、彼の方へ意識を向ける。

「——ふう、助かった。おい、そっちは大丈夫だったか!？」

そう叫びながら走ってくる彼に、俺は軽く手を上げて合図をしながら頷く。

「あんたのおかげで、怪我人だけで死人は出ずに済んだよ。それでビッグエイブはどうした？」

「ちゃんと仕留めてきたから心配するな。勝手が出来ないから放置してあるので、必要ならば処理しておいてくれ」

助人として戦闘に加わった俺が、ビッグエイブの死体を勝手に処分したりするわけにはいかない。獲物によっては素材となったり、討伐依頼による報酬が発生したりするからだ。

「そっちで処分しておいてくれて構わなかったのだから。だが、一応雇い主に確認をとってから対応しておくよ。後で何か言われてもお互い気まずいからな。あ、俺は護衛のリーダーでロウという者だ。じゃあ少しだけ待っていてくれ」

ロウはそう告げると依頼主の乗る馬車へと走っていく。俺は面倒ごとにならなければいいがと考えるながら、彼が戻ってくるのを待つことに。

数分後にはロウが戻り「こちらで処分しておくので大丈夫だ」と告げて、護衛メンバーに指示を

出す。それから俺に頼みがあると言い出した。

「実は今の戦いの話を聞いて、俺たちの依頼主が直接お礼をしたいと言っているんだ。一緒に来てもらえるだろうか？」

「直接礼をだつて？ 俺も護衛依頼中の身だ、勝手は出来ないから確認する時間をくれなやか？」

俺はそう言うのとキースの乗る馬車へと戻り、彼に指示を仰ぐ。キースは少し口角を緩めてから指しをくれた。

「彼と一緒にその依頼主に会ってくるといい。その間に、私たちはその依頼主がいる場所までゆつくりと馬車を進めておくから。君は彼の話聞いて素直な反応をしたらいい」

そう言うってキースは俺に行くように促した。

「悪趣味ですね」

俺がロウと歩き出した後でぼそつと呟くガーネットの声が聞こえたが、今は聞こえないふりをして歩を進めたのだった。

「助力頂いた冒険者の方をお連れしました」

俺はロウに連れられて彼の依頼主——商人アールドの馬車へと来ていた。

「おお、お前がビッグエイブを一人で倒したという者か。いやいや、なかなかの腕であるな。ランクはいくつなのだ？」

「冒険者ランクならばBランクだが、それが何か？」

「なに？ Bランクなのか。ビッグエイブを単独で倒したからには少なくともAランクかと思つたが、こいつは掘り出し物かもしれないな」

アールドはハゲ頭を摩りながら何やらブツブツと独り言を言いつつ、笑顔を向けてきた。

「それはギルド職員の見目がないのではないかな？ ワシがギルド職員であればもつと上のランクをつけてやれるのだが」

彼はそう言うのと「ううむ。そうだな」と思わせぶりの言葉を発したかと思うと、ポンと手を叩き俺に提案を持ちかけてきた。

「今、お前はいくらで雇われておるのだ？ 今からワシの護衛に鞍替えするならば、相手への違約金^{きん}ともらっている報酬の倍出すとしよう。どうだ？ 悪い話ではないだろう。どこの馬の骨か分からん弱小商人にお前のような高ランクの護衛はもつたないからな」

「——ほう、どこの馬の骨とは私のことかな？ アールド殿」

いつの間にか隣に横付けした馬車から顔を出してそう言ったのはキースだ。アールドは顔を引きつらせて叫ぶ。

「キースギルドマスター!? どうしてこちらに？」

「公務でダクトに向かう途中だ。それにしても、私が直接雇った冒険者を依頼の完了前に無理矢理に引き抜こうとするとは、ずいぶんな度胸の持ち主だね」

キースは馬車の後方から降りると、彼の馬車の前で仁王立ち^{におうだち}して話を続けた。

「その上、様子を見るに、馬車を通常より早く進ませておいて、そのくせ護衛の者はそれに併せて走らせていたようですが、一体どういうつもりなのかな？ どう考えても疲弊して満足に護衛業務が出来ないと思うのだがねえ。そういうた行為がギルド規約に抵触することは、当然ご存知ですね？」

「口元は笑っているが、目が全然笑っていない顔でキースはアールドにそう告げた。」「い、いえ、確かに少々スピードは速かったかもしれませんが、十分な休憩はとっていましたので問題は無いと認識しております」

冷や汗を流しながら必死に弁明するアールドに、目を細めながらキースは続ける。

「それならばいいのですが、そういった行為が発覚した時に護衛の方々が負傷されていた場合は、罰金が科されることをお忘れなく。ああ、それと私の雇っている冒険者がそちらの馬車の救援をしたことについては、後ほど報酬を請求しますのでよろしくお願ひしますね」

「ぐっ。わ、分かりました。ダクトのギルドに納めるようにいたします」

アールドは王都の商業ギルドマスターの言い分には反論出来ず、しぶしぶではあるが了承して頷いた。

「では、私どもは先に進ませてもらうから、この場の処理と後ほど報告もお願いしますよ。ガーネット君、出発しましょう」

キースはそう言うと、アールドに「では、また」と軽く会釈をして馬車に乗り込んだのだった。

「強いんですね」

今夜の目的地であるラウの村に到着するまで時間的な余裕が出来た俺たちの馬車は、高速走行をやめて通常のペースにて進んでいた。

それで少し余裕が出てきたマリイが、隣に座るガーネットに話しかけたのだ。

「わたくしは護衛の任務も兼務していますので、このくらいは普通だと思いますよ」

特に表情を変えずに答える彼女に、マリイは「私には戦える力がないから羨ましいです」と言つて苦笑いを返した。

「過去に何かあったのでしょうか？」

マリイの様子にガーネットが興味を抱いたのかそう問いかける。マリイは先日起こった盗賊団との出来事を掻い摘んでガーネットに話し始めた。

「それは仕方ないのではないですか？ マリイさんは戦闘の訓練を受けたことのない普通の商人ですよね？ 力がないからこそ護衛を雇うのですし、逆にそこまで強い人が商人をやっているのを聞いたことがありますので……」

「どうやらマリイは自分に力がなかったせいでトラブルに巻き込まれたと考えていたようで、強いガーネットの姿を見て憧れたみたいだ。」

「マリイ。君が強くなつてしまつたら俺は立場がなくなつてしまうぞ」

マリーの言葉が聞こえた俺は、少し意地悪な言い方をしてみる。

「い、いえ。そんなことはないです。ただ、私も少しいいのでアルフさんの力になればと思っただけです」

そう言って慌てて否定するマリーに、俺は「冗談だ」と言って優しく笑いかけたのだった。

3

「——そろそろ村が見えてくる頃ですでお伝えしておきますが、村には宿屋は一軒しかありません。なので、アールド殿も同じ宿に泊まることになるはずですよ。こちらから話しかけることはありませんが、絡んでくる可能性がありますので、穏便な対応をお願いします」

俺よりもキースやガーネットの方が事を荒立てる可能性は高いように思ったが、黙って了承の意を込めて頷いておいた。

「村が見えてきました。宿などの手配はわたくしが行いますが、馬車を預ける必要がありますので、先に中に入られたらホールでお待ちください」

ガーネットはそう告げると馬車を操り、村の門をくぐった。

「——これはキース殿、ようこそおいでくださいました。本日は公務でお泊まりでしょうか？」
村に到着した俺たちが宿に入ると、宿屋の主人がキースに気がついて話しかけてくる。

「はい、公務での移動中です。二人部屋を二つお願い出来ますでしょうか？」

宿屋の主人の言葉にキースが返事をする前に、馬車を預け終えたガーネットが答えていた。

「ああ、ガーネットさんも同行されてましたか。後ろのお二人もお連れ様で？」

「はい。実はギルドの馬車が壊れまして、急ぎだったために商人である彼女たちの馬車に同乗させて頂いているのです」

「それは、それは。馬車が壊れるとは不便ですね。分かりました。では、二人部屋を二部屋準備させて頂きますね」

宿屋の主人はそう答えると、部屋の鍵を二つ持ってきてガーネットに手渡ししながら、部屋の説明をしてくれる。

「部屋は三階の端から二つになります。間取りは同じなので、どちらを使われても問題ありません」

「ありがとうございます。ではこの鍵はあなたに……」

ガーネットは宿屋の主人から預かった部屋の鍵のうち、片方を俺に渡す。

「わたくしどもは突き当たりの部屋を使いますので、あなた方は隣の部屋でお休みください」

ガーネットは俺たちにそう告げると、キースと共に荷物を置きに部屋に向かおうとする。

「部屋割りはこれでいいのか？」

キースとガーネットが相部屋だと思わなかったため思わずこぼれた言葉に、ガーネットは表情も変えずに淡々と答える。

「公務ですので、わたくしはキース様の護衛として安全面を考慮して同室を選択しているのですが、お二人は別部屋がよろしかったでしょうか？」

以前あったハプニング以降は全て別部屋をとっていた。ただ、今回はギルドの依頼条件のひとつにあつた『道中の宿泊費はギルドが負担する』に当たる。依頼報酬と別にギルドが支払うものなので、俺たちのために二部屋取らせるのは悪い気もする。

「マリーはどうだ？ やはり別々に部屋を取ってもらうか？」

今回は部屋が空いていないわけではないので、無理を言えば別に部屋を取るのは出来るだろうから、ここはマリーの意見を尊重しようとして聞いてみることにした。

「問題ありません。この宿泊費もギルドの負担と聞いていますので、最小限に留めた方がいいですよ。それに、同室宿泊は以前にもありましたから大丈夫ですよ」

あの時とは状況が違うが、マリーも同意しているので無理を通すのは控えよう。なに、俺はマリーの保護者兼護衛だ。しっかりとその役目を全うするだけだ。

「分かった。それで問題ない」

俺の返事を聞いたキースは、先に階段を上りながらこの後の予定を話してくれる。

「部屋に荷物を置いたら先に食事を済ませておこうか。明日は朝食後すぐに出発するので、今晚の酒は控えてくれると助かるよ」

「キース様。自分が公務で飲めないからって、彼にそれを押し付けるのは感心しませんよ？」

「そう言うな。公務でなければ、晩酌ばんしやくの一杯を楽しめるところを我慢しているのだ。目の前で美味うまそうに飲まれてはせつかくの飯めしも不味まずくなるからな」

意外と真面目なところもあるのだなと思つたが……彼も相当に酒が好きなようで、他人が飲むのは見たくないというのが真意らしい。駄々だだつ子こみみたいな態度をとる彼に、俺は親近感を抱いたのだつた。

「大丈夫だ。どちらにしても今日は飲むつもりはなかったからな」

「本当にすみません。キース様は仕事ぶりは優秀なのでですけど、お酒が入るとポンコツになるところがありまして……」

「誰がポンコツだ。私にそんなことを言うのは君くらいのものだよ」

「そうですね？ 本当のことを言っているだけなのですかね」

ガーネットは苦笑してそう言いながら、キースに続いて軽快に階段を上り始めたのだつた。

「なんだか、ガーネットさんって凄い人ですね」

二人のやりとりを見ていたマリーがそんな感想を話す。

「そうだな。なんとなくだが、彼女は事実上、ギルドマスターより権限を持っていそうな感じだ

よな」

「確かにそんな感じもしますね」

「まあ、どちらにしてもギルドの内部のことだから、俺たちがあれこれ詮索したところで仕方ないぞ。それより俺たちも部屋を見にいっておくとしようか」

「そうですね。このあと食事も摂らないといけませんからね」

傍から見れば夫婦漫才を見せられているかのようだったが、詮索すると数蛇になりそうだったので、この話はこれで終わることにしたのだった。

「――普通の部屋だな。問題はなさそうだ」

その後、俺はマリールと共にあてがわれた部屋にベッドが二つあることを確認して、ホッと息を吐く。ダブルベッドだったりしたらクレームものだ。

「マリールは奥のベッドでコトラと一緒に眠るといい。何かあった時に対処しやすいように、俺が入り近くのベッドを使わせてもらおうから。仕切りカーテンもあるようだしゆっくり休んでくれ」

「は、はい。ありがとうございます」

マリールは少し緊張したような声で俺の言葉に答えると、鞆を棚に置いてベッドにボスンと倒れ込んだ。

「はー、今日は疲れました。確かに馬だけでなく馬車にも強化魔法をかければ速く進めますけど、

あの振動はどうにも慣れそうにないですね」

「そうだな。俺たちだけならゆっくりとした旅になったと思うが、ダクトの町までは仕方ないだろうな。それに、商業ギルドに恩を売れる機会なんてそうあるものじゃあないからな」

俺がそう言った時、部屋のドアがノックされ、ガーネットの声が聞こえてきた。

「先に食事を済ませますので、一階の食堂へお願いします」

「分かりました」

ガーネットの気配が部屋の前からなくなつたので、俺は寝転がっているマリールに声をかけて食堂へ行く準備をした。

「美味しい食事だといいな」

「そうですね。お酒が飲めないのは残念でしょうけど、食事が美味しいと気分が上がりますものね」

マリールと一緒に部屋から出た俺は、そんな会話をしながら一階の食堂へと下りていく。

「――だからと言って、公費での買い替えは無理ですよ」

食堂に入ると、先にテーブルについていた二人がなにやら口論している声が聞こえてくる。

「何かあったのか？」

二人の雰囲気から喧嘩をしている感じではなかったのですが、俺は興味本位で聞いてみた。

「ああ、いや。特に問題があったわけではないが、荷物を運ぶのに魔法鞆を使うことがあるだろ？」

現在使っている鞆は容量が少なすぎて、必要な物が入らないことが多いのだ。なんとか新調出来ないかと交渉していたところだ」

キースの愚痴にガーネットは表情のひとつも変えずに淡々と答える。

「魔法鞆そのものが貴重ですし、性能が高い物は滅多に出回らないと聞いています。ですので、かなり高額になりますから公費で買うことは認めてもらえないと思われれます。もしどうしてもと言われるのであれば、キース様の個人資産から捻出をお願いしますね」

キースの魔法鞆を公費で購入する話をガーネットが即座に却下していたようだ。この人、本当にギルマスより権限が上のような気がする。

「容量によって値段が変わるんだったよな？ 欲しいやつはかなりの高額商品なのか？」

先日、マリーに魔法鞆の価値を教えられたばかりだったが、話の流れで口を挟んだ。

「キース様が欲しいと話されているものは、末端価格で金貨千枚は下らないと思われれますので、全くの論外ですね」

ガーネットは怒っているわけではなさそうだが、現実的に無理なものは無理とはつきり言うタイプなのだろう。きつい言い方だが、キースにしてもそのことを咎めるつもりはないようだった。

「ん？ ああ、こういったくだりはいつものことだから気にしないでくれたまえ。私も公費で魔法鞆を新しくすることが難しいのは、十分に分かっているつもりだ」

キースはそう話すと口角を上げて笑い、俺たちに席に座るように言ったのだった。

「そういえば、二人はずいぶんと距離が近いように見えるが、実は親子だったりするのかわ？」

俺は椅子に座りながら二人の年齢差を考えて、ふと思つたことを聞いてみた。

「はっはっは。まあ、話と態度だけ見ればそう見えるかもしれないが、ガーネット君は私の有能な部下というだけだ。まあ、ギルド内で私にはつきりと苦言を言ってくれる貴重な存在ともいえるかな」

笑いながら説明をしてくれるキースに、ガーネットはほぼ無表情のまま頷くのだった。

「店主、全員揃ったので夕食を頼む。料理はオススめでいいが、公務中なので酒はなしで頼むよ」

俺たちが席につくとキースが店主を呼び、夕食の手配を頼む。

「かしこまりました。少々お待ちください」

キースの言葉に、店主は慣れた様子でその場でお辞儀すると、くるりと向きを変えて厨房へと消えていった。

「この村は王都とダクトを繋ぐ中継地点だから、どちらの料理も作れるようにしてあるのだよ。そして、今回のようにオススメを選択すると、どちらでもないこの村独自の料理が振る舞われる。私はそれが気に入っていてね」

初めて村を訪れた俺に対して、キースはそう教えてくれる。

「ムム鳥の香草蒸し焼きとマルイモのサラダです。お飲みものは果実水となります」

話しながら十分ほど待つと、厨房から給仕の女性が料理を運んでくる。

「おお、ムム鳥は久しぶりだな。前に来た時に言っていたことを覚えていてくれたのか」
 「はい。店主が、以前キース様に褒めて頂いた時のことを覚えていたようで、すぐに決めたようです」

「それはありがたい。店主にお礼を伝えておいてくれ」

給仕の言葉を聞いてキースはそう言うのと、満面の笑みを浮かべながら料理を頬張った。

「これは美味しいな」

「はい。お肉の柔らかさですが、この味付けがいいですね」

俺たちの前にも並べられたので遠慮なく手をつけると、予想以上の味に思わず言葉が漏れる。

「そうだろう？ この宿の料理人は腕がいいから、安心して料理を頼めるのだよ」

キースが上機嫌にそう語っていた時、入口辺りが騒がしくなった。声から察するに、思ったよりも早くアールドの馬車が到着したようだ。

「個室の一番いい部屋は空いているか？」

「これはアールド様、ようこそお越しくださいました。いつもの二階の一番奥の部屋でよろしいでしょうか？」

宿屋の主人は慣れている様子で、アールドの要望に応えた部屋を勧める。

「ん？ 今日は先に王都のギルマスが来ているはずだが、あの部屋へは案内しなかったのか？」

「キース様は別の部屋をご指定されましたので、そちらへご案内させて頂いております」

アールドは拍子抜けした様子で部屋へと向かおうとしたが、食事中的こちらに気がつくのと、ニヤニヤとした表情ですぐ傍まで歩いてくる。

「これは、お早いご到着で。先ほどほとんど醜態をさらしてしまいましたな。いや、申し訳ない」
 つい先ほどやり込められた相手に対してこの態度とは、相当に凶太い神経をしているのだろう。

「ふん。君も思ったより早い到着のようだが、先ほど言ったことは忘れていないだろうか？」

「護衛の休憩時間のことならばしっかりと確保しておりますよ。気になるようでしたら本人たちに聞いてみればよろしいかと」

にやりと笑って白々しくそんな言葉を吐くアールド。キースはちらりと彼を見て「そうだな、そうさせてもらおうとするか」と言って席を立った。

「おやおや、本当に信用がないですね」

アールドはため息をついてキースの行方を目で追った。

「日頃の行いのせいではないのでしょうか」

目も合わせないでガーネットがそう淡々と告げると、その言葉に反応してアールドが彼女に絡んでくる。

「おや、そういえば今回もガーネット嬢が同行されているのでしたね。まあ、見目がよいので傍に置くにはいいですが、もう少し女性らしく愛嬌を持たれたら可愛げが出るといいますよ」

——ぴしっ。

ガーネットの持つグラスが急激に冷やされて音を発した。

「おっと、こんな所で攻撃魔法など使うと、キース殿の立場が悪くなりますぞ」

ガーネットは冷めた視線をアールドに向けて何か言おうとするも、フイと視線を外して無視を決め込んだ。

「そちらは先ほど活躍された冒険者の方と、そちらのお嬢さんは服装からして商人ですか？」

ガーネットが無視を決め込んだことで、今度はアールドの興味がマリーへと向く。

「今どき、個別単体の行商など儲かりはしないだろうに。どうしても商売がやりたいのならば、うちで雇ってもいいのですがね」

アールドはマリーを舐めるように見てそう告げる。

「目障りだな」

俺はアールドの不躰な視線がマリーに向いていることに嫌悪感を抱き、こっそりと収納から取り出した酒精の高い酒に魔法をかけた。

「水球」

テーブルの下で、数センチほどの大きさの酒の球を作り、追尾の魔法を付与。下品に大口を開けて笑いながら話すアールドの口に、隙を見てねじ込んだ。

「大体がワシの誘いをことわ…ガボツ!? ゴクリ」

アールドは突然口の中に液体が飛び込んだことに驚いたが、反射的に飲み込んでしまう。

「な？ なんだ、今の液体は？ ガボツ!？」

続けて何度も口に飛び込んでくる液体が酒だと気がついた時には、彼は既に許容量を超えたアルコールを飲まされており、ベロベロに酔っ払ってその場に崩れていた。

「おいおい、酔っぱらって絡むのは勘弁してくれよ。おい、この迷惑な男を部屋に運んでくれ！」俺は床で寝てしまったアールドを、宿屋の主人に頼んで部屋に連れていってもらおう。そして主人に礼を言うと、少し冷めた料理の残りに手をつけた。

「何かあったのか？ アールドが店員に抱えられて運ばれていったようだが、まさか魔法でふっ飛ばしてないだろうな？」

アールドの護衛たちの事情聴取を済ませて戻ってきたキースが、疑いの目を向けて聞いてくる。

「俺がふっ飛ばしていたら彼も店も無事ではないだろう。急に彼が酔っ払って眠ってしまっただけだ」

「そうか、それならばいいが、あまり無茶をしないようにな」

キースもおそらくだが、俺が起こしたことだと認識していたようだ。だが、それ以上追及することもなく食事を済ませ、部屋へと帰っていった。

「ありがとうございます」

ガーネットが食事を終え、部屋に戻るために席を立ったタイミングでお礼を口にしてきた。当然彼女が気づかないはずはないと思っていたが、俺はとりあえず惚けておく。

「なんのことかな」
「いえ、別に……。なんとなく言ってみただけです」
そう言って業務連絡をし始めるガーネットは、いつもの無表情ではなく優しく微笑んでいるように見えたのだった。



「——それではダクトへ向けて出発しますね」

翌日の早朝のこと。俺たちは早めに準備してもらった食事を早々に食べ終えると、アールドが起きて絡んでくる前に宿を出た。ダクトに向かうため馬車に乗り込んでいく。

「ここからだ、この時間に出発すれば、昨日のような強行でなくとも夕暮れにはダクトの町に辿り着ける想定です。今日は強化魔法を使わずに進みますね」

昨日のうんざりする馬車の振動を今日も体験するのかと身構えていたマリーは、彼女がそう告げたので心底ホッとした表情を見せていた。

「やはり、マリー様には無理をさせてしまっていたようですね」

マリーの心情をくみ取ったガーネットが、そう言って頭を下げる。

「い、いえ。大丈夫ですよ」

マリーは恐縮したようにそう答え、コトラを抱いて補助席に座る。それを見たガーネットはゆっくりと馬車を走らせ始めた。

無理のない走行スピードに気持ちのいい風を感じながら、俺が先のことを考えていると、御者席のガーネットから声をかけられる。

「どうかしたか?」

「いえ、アルフ様は見た目は剣士ですが、昨日の魔法を見る限り魔法にもかなりの適性を持っているように感じました。わたくしも多少の魔法を使う者として大変興味があるのですが、一度お話を聞かせて頂けたらと思います……」

「ああ、奴の口に酒を押し込んだ魔法のことか。あれはそれほど高度なものじゃないんだが、確かにそれなりの魔力制御は必要かもしれない。簡単にでよければ次の休憩時に教えてやるよ」

「本当ですか? ありがとうございます」

ガーネットは俺の言葉に珍しく笑顔で返した。

馬車が休憩場所に着くと、ガーネットはすぐに俺の所に駆け寄り、話を聞きたいと願ってきた。「本当に初歩だけだからな」

俺はそう言って、傍に流れていた小川の水で右手に数センチ大の**ウォーターボール**を作る。それをガーネットに見せると、水球を指先に移動させてからクルクル回し、ピンと指先で弾く。すると、水球は勢